ヴィジュアル音楽文化史：ウィーン編
――オンデマンド型授業の事例報告

安原雅之　愛知県立芸術大学音楽学部教授（音楽学）

2020 年度は、コロナ禍に翻弄された一年だった。愛知県立芸術大学では、入学式や各種ガイダンスも中止となり、2020 年度前期は 5 月の連休明けに、全て遠隔授業で開講するというかたちで開始された。そして、大学におけるオンラインの授業という、それまで全く聞いたこともないようなことが突然始まった。全国の、いや世界中の大学が同じような状況に追い込まれていたと思うが、本学においても、緊急会議が何度も召集され、新学期のさまざまなことは次々と中止、延期、あるいは変更を余儀なくされた。4 月には大学で使うインターネットのネットワークに関わる講習会が催されるなど、学生不在の静かなキャンパスで、大学の業務は慌ただしく動いていた。

オンラインの授業は、文字通り暗中模索の状態から始まった。授業は、シンプルな課題提出型のものから始まったが、やがて、Zoom や Teams を使ったリアルタイムの遠隔授業や、また、動画を配信するオンデマンド型の授業なども始まった。いずれの場合も、コンピュータのソフトウェアも、スマートフォンのアプリケーションも、初めて使うものであったため、最初は戸惑うことばかりであった。だが、実際にやってみると、新たな可能性の発見もあった。たとえば、Zoom で行う授業では、普段より明らかに遅刻者が少なかった。単純なことだが、自宅からインターネットにアクセスする場合、通学時間がなく、時間には余裕ができているようだった。また、画面共有による資料の提示は、教室のモニターを使った場合よりも見やすく、レジュメの印刷や配布の手間もなく、円滑に進めることができた。10 数名以下のゼミなどの場合、参加者がひとりずつ個別に画面に表示されている様子は、あたかも受講生が対等な立場でゼミに参加しているようにも見受けられ、新鮮な気持ちで授業を行うことができた。

この一年間のさまざまな経験を通して思ったことは、授業は、対面に勝るもの無しではあるが、オンラインの授業にも、多くのメリット、および可能性が

あるということであった。

本稿は、筆者が 2020 年度前期に担当した授業[1]の事例報告である。

この授業は、音楽に焦点をあてた「文化史」で、昨年度までは通常の対面授業として行なっていたもので、かつてテレビで放送された番組の録画を教材として見せながら講義をする、というかたちをとっていた。その番組は、1 回ごとにヨーロッパの都市を取り上げて、その都市にまつわる音楽作品を映像付きで流すというものだった。オンライン授業では、テレビ番組の録画は使えないため、今回は、いろいろな都市に焦点をあてるという流れはそのままに、全く新しい内容構成で授業を組み立てた。

ここで紹介するのは、ウィーンを取り上げたオンデマンド型の授業（動画配信による）の内容を再構成したものである。教材として使ったのは、ウィーンの観光スポットを紹介する ANA のウェブサイト[2]と、ウィーンにおける音楽関係の博物館を紹介するサイト[3]である。

筆者が、実際にウェブサイトを閲覧しながらマイクに向かって喋る（講義する）ものを、コンピュータの“画面収録”の機能を使って動画として保存し、それらをひとつの動画に編集した。授業の動画は、受講者だけが「共有」できるように設定し、期間限定でオンライン配信する、という方法をとった。

1．ANA のウェブサイト：ウィーン・ヴィジュアル・トリップ

パソコンのデスクトップに表示された動画

まず、このサイトのトップを飾るシュテファン大聖堂 Stephansdom の華麗かつ荘厳な建造物を確認しておきたい。この大聖堂は、ウィーンの代表的な観光名所のひとつであるが、このサイトでは次のように紹介されている。

「ウィーンの象徴」または「ウィーンの魂」ともいわれる街のシンボル的な建築物。12 正規からロマネスク様式で建築がはじまり、のちにゴシック建築に改築された。約 137 mの高さを誇る南塔は、見る者を圧倒する。ハプスブルク家の歴代君主の墓所として、また作曲家モーツァルトの結婚式と葬儀が行われた場所としても有名。地下には、17 世紀にペストで亡くなった約 2000 人の遺骨が保管されている。

モーツァルトに関しては、たとえば『ニューグローヴ音楽事典』の「モーツァルト」の項に“シュテファン大聖堂”の語は 3 回出てくるが、上記の 1782 年の結婚式のことのほかに、1784 年に大聖堂のすぐ近くに引っ越したこと［下記 1. の (8) を参照］、また、最晩年にはこの大聖堂における副楽長の地位（無給）を確保したことが記されている[4]。古典派の作曲家では、ハイドンの方が、シュテファン大聖堂により深く関わっていると言えるだろう。音楽史の教科書には、次のように記載されている。

［7 歳の時に］ヴィーンの聖シュテファン大聖堂の少年聖歌隊員となり、ここでおおいに実践的な体験を積んだが、体系的に音楽理論の教えを受けることは無かった。声変わりのために解雇されると、この若者は自由の身の音楽家・教師の仕事でやっと自分の生活を支えた[5]。

この時代のハイドンについては、「惨めな存在の 8 年間」[6] とも言われるように、恵まれているとは言えない環境であったかも知れないが、7 歳からの 8 年間という時期をこの場で過ごしたことは、音楽的なことを含めて、その後のハイドンに多大な影響を与えたに違いない。

さて、このウェブサイトでは、ウィーンをめぐる“ヴィジュアル・トリップ”として、次の 5 つのコースが紹介されている：〈1. ウィーンの魅力が凝縮：王道を巡る〉、〈2. 荘厳華麗なる風景：建築を味わう〉、〈3. 歴史と絵画と音楽と：芸術に浸る〉、〈4.“映える”景色の連続：写真を楽しむ〉、〈5. 実はグルメの都：美食と旅〉。それぞれ、複数の名所がキャプション付きの画像で紹介されている。

授業では、これらのうち、〈3. 歴史と絵画と音楽と：芸術に浸る〉を取り上げる。ここで紹介されるのは、次の９つの観光スポットである。これらのうち、主に音楽に関わる（４）～（９）を見ていく。

3. 歴史と絵画と音楽と：芸術に浸る
（１）オーストリア国立図書館 Austrian National Library
（２）マリア・テレジア記念碑 Maria Theresa Monument
（３）美術史美術館 Kunsthistorisches Museum Wien
（４）ウィーン国立歌劇場 Vienna State Opera House
（５）セセッション館 Secession Building
（６）ベートーヴェン 記念碑 Beethoven Statue
（７）ヨハン・シュトラウス記念像 Monument to Johann Strauss
（８）モーツァルトハウス・ウィーン Mozarthaus Vienna
（９）グリーヒェンバイスル The Griechenbeisl

（４）ウィーン国立歌劇場 Vienna State Opera House

ウェブサイトにおける歌劇場のキャプションを引用する。

> ウィーンのランドマークの一つで、世界最大のレパートリーを誇る歌劇場。1869 年にネオルネサンス様式で建てられた宮廷歌劇場は、皇后夫妻のフランツ・ヨーゼフ 1 世とエリザベートの臨席のもと、モーツァルト の「ドン・ジョバンニ」でこけら落としを行った。第二次世界大戦で大きな被害を受けたが、1955 年に再建。それ以降も、多くの有名作品がこの歌劇場から生まれ、現在は毎年 300 以上のオペラやバレエ公演が行われている。

ここから、さらに歌劇場の公式ウェブサイトに飛び、歌劇場の歴史を辿ることができる[7]。その説明によれば、こけら落としが行われたのは 1869 年 5 月 25 日であり、その後、歴代の音楽監督によって伝統が築かれ、グスタフ・マー

ラー（1897 年就任）へと受け継がれていく。

また、ウィーンにおけるコンサート会場としては、ウィーン楽友協会 Wiener Musikverein が挙げられるが、ここで一旦 ANA のウェブサイトから離れて、この施設の公式ウェブサイトで、1812 年の設立以来の歴史を辿る[8]。ベートーヴェンが名誉会員になり、シューベルトがハ長調の交響曲を協会に献呈したこと（1826 年）、今日に続く舞踏会が開催されるようになったこと（1830 年）、最晩年のメンデルスゾーンが《エリア *Elias*》を指揮したこと（1847 年）、シューベルトの〈未完成交響曲〉初演（1865 年）、ブラームスの《ドイツ・レクイエム》初演（1867 年）、リストが名誉会員になる（1881 年）など、まるで音楽史そのもののようなこの組織の歴史を、さまざまな画像とともに見ることができる。

（5）セセッション館 Secession Building

ここは、世紀末のウィーンを象徴する分離派の拠点である。ウェブサイトでは、次のように説明されている。

> 1800 年代後半の芸術家グループ、ウィーン分離派（セセッション）の展示施設で「分離派会館」とも呼ばれる施設。当時芸術界を支配していた保守的な派閥から“分離”し、自分たちが信じる作品を発表する人たちのために建てられた。設計は分離派メンバーであり建築家ヨーゼフ・マリア・オルブリヒ。白亜で直線基調の建物に、月桂樹のドーム屋根や金色の動植物のモチーフの彫刻などが施されている。その佇まいから、「金のキャベツ」という愛称もある。

ここでは、「必見はクリムトの不朽の名作」という見出しで、分離派の初代代表グスタフ・クリムト Gustav Klimt（1862-1918）の大作〈ベートーヴェン・フリーズ *Beethovenfries*〉（1901）が、作品の画像とともに紹介されている。これは、全長約 34 m、高さ 2 mの壁画で、1902 年に開催された第 14 回分離派展で発表されたものであり、現在は、地下の特別展示室に常設されている。

この作品は、ベートーヴェンの交響曲第９番 Op. 125 に基づくものとして知られている。全体は３つの部分に分けて描かれており、それらは部屋の３つの壁面に連なるように設置されている。ベートーヴェンから続くウィーンの伝統を視覚的にとらえることができる作品であるとも言えよう。

講義では、分離派の代表的画家のひとりとして、エゴン・シーレ Egon Schiele（1890-1918）も取り上げるが、ここでまた ANA のウェブサイトから離れ、まず、シューベルトの〈死と乙女〉（歌曲 D.531 と弦楽四重奏曲第 14 番 D.810 の第２楽章）を紹介したのち、シーレによる絵画「死と乙女」（1915 年）および、シーレの伝記映画「エゴン・シーレ：死と乙女」（ディーター・ベルナー監督、2016 年公開）を紹介した [9]。

（７）ヨハン・シュトラウス記念像 Monument to Johann Strauss

これは、彫刻家エドムント・フォン・ヘルマー Edmunt von Hellmer（1850-1935）によるモニュメントであり、ヴァイオリンを弾きながら指揮するスタイルで有名だったヨハン・シュトラウスの姿を再現している。ウェブサイトの説明によれば、1921 年に除幕して以来、黒く塗られたこともあったが、1991 年に現在の金色に戻された。

この像は、約 96000 平方メートルの広さをもつ市立公園 Wiener Stadtpark に設置されている。同じ公園内には、ウィーンの音楽文化を象徴する次の 4 人の作曲家の彫像も置かれている [10]。

フランツ・シューベルト Franz Schubert（1797-1828）
アントン・ブルックナー Anton Bruckner（1824-1896）
フランツ・レハール Franz Lehár（1870-1948）
ロベルト・シュトルツ Robert Stolz（1880-1975）

これらの音楽家のうち、シューベルトは言うまでもなくウィーン生まれの、ウィーン人を代表する音楽家である。リンツに生まれてウィーンで亡くなった

ブルックナーは、人生の半分以上をウィーンで過ごしている。そして、レハールとシュトルツは、ウィーンにおけるオペレッタ発展に大きく貢献した人物である。

（8）モーツァルトハウス・ウィーン Mozarthaus Vienna

ウィーンで10回以上引越しをしたと言われるモーツァルトが住んだ場所で、当時の建物が残っているのはここのみである。モーツァルト一家は、1784年から1787年までここに住み、モーツァルトはここで歌劇《フィガロの結婚》や、“ハイドン・セット”という総称で親しまれている6曲の弦楽四重奏曲などを作曲した。

モーツァルトハウスの公式ウェブサイト[11]によれば、モーツァルトが住んだ当時の部屋を再現する改築がなされたのち、ここが2006年にモーツァルトハウスという博物館として開館した。住居は、4つの大きな部屋、小さな部屋2つ、そして台所からから構成される。博物館のキュレーションはウィーン博物館によってなされており、モーツァルトがウィーンで過ごした10年間（1781-1791）に焦点をあてた展示が行われている。また、「モーツァルトのアパートメント」というページでは、博物館の内部を、画像で見ることができる[12]。

（9）グリーヒェンバイスル The Griechenbeisl

芸術を巡る旅の最後に登場するのは、「ウィーン最古のレストラン」であるところの“グリーヒェンバイスル Griechenbeisl”で、名物料理ウィーン風シュニッツェルの画像とともに紹介されている。「レストランの創業は1447年、建物自体は1359年頃まで遡る」という歴史的な場所であり、さまざまな人が訪れているが、音楽家では、ベートーヴェン 、シューベルト、ブラームスらがここに集ったという。“マーク・トウェインの間”と呼ばれる部屋には、このレストランに集った有名人たちのサインが壁や天井にぎっしり描かれているが、そこには上記の音楽家のものも含まれる。

以上、観光の宣伝を目的とするウェブサイトであるが、画像を連ねることによって構成される内容は、補足的な解説をほどこすことによって、わかりやすい教材となり得ると言えるだろう。また、観光という視点ならではのこととも言えるが、歴史的な人物が彼らの日常生活において訪れた場所、たとえばレストランなどを実際に訪れることは、それがヴィジュアルな体験であったとしても、文化の歴史を実感する体験となり得るのではないだろうか。

２．ウィーン博物館 Wien Museum

ウィーンには、音楽家にかかわるさまざまな博物館があるが、それらのいくつかはウィーン博物館の関連施設となっている。それらのうち、次の６つの博物館は、１枚のチケットで周ることができるようになっている。

（１）ベートーヴェン博物館 Beethoven Museum[13]
（２）ベートーヴェン・パスクヴァラテイハウス Beethoven Pasqualatihaus[14]
（３）ハイドンハウス Haydnhaus[15]
（４）ヨハン・シュトラウス住居 Johann Strauss Wohnung[16]
（５）シューベルト生誕の家　Schubert Gburtshaus[17]
（６）シューベルトが亡くなった家 Schubert Sterbewohnung[18]

（１）ベートーヴェン博物館 Beethoven Museum

1787 年にウィーンにやってきたベートーヴェンは、1792 年からここに住んだ。有名な「ハイリゲンシュタットの遺書」は、この家で書かれている。作品では、ニ短調のピアノソナタ Op. 31-2「テンペスト」や〈プロメテウスの創造物〉の主題による変奏曲 Op. 35 などが作曲されたほか、交響曲第３番「英雄」Op. 55 の最初スケッチがここで成されている。

画像では、いくつかの肖像画や自筆の「ハイリゲンシュタットの遺書」のほ

か、展示風景などの全 17 枚の写真を見ることができる。

（2）ベートーヴェン・パスクヴァラティハウス Beethoven Pasqualatihaus

ここは、所有者であるパスクヴァラティ Josef Benedikt Baron Pasqualati にちなんで、パスクヴァラティハウスと呼ばれる。建物は 18 世紀に建てられたもので、市の古い要塞が残っている中心地に位置する。ベートーヴェンは、ウィーンで過ごした 35 年のうち、８年間はここに過ごした。ベートーヴェンが使ったのは４階の部屋で、窓から見える風景は、ベートーヴェンがいた頃からそれほど変わっていないのではないだろうか。ここで作曲した曲には、交響曲の第４、５、７、８番のほか、オペラ《フィデリオ》が含まれる。

６つの画像には、展示風景などが含まれる。

（3）ハイドンハウス Haydnhaus

この住居は、2 回にわたってイギリスに滞在した間の時期にハイドンが購入したもので、当時はウィーンに隣接する村のような所だった。彼がここに引っ越したのは、1797 年、彼が 65 歳の時であり、1809 年 5 月 31 日に亡くなるまで、最後の 12 年をここで過ごした。この博物館は、没後 200 年を期に整備され、ハイドンの晩年に焦点をあてた展示が公開されている。ここで作曲された作品には、２つのオラトリオ《天地創造》と《四季》がある。

画像では、館内の展示風景のほか、当時のスタイルで造園された庭などを見ることができる。

（4）ヨハン・シュトラウス住居 Johann Strauss Wohnung

有名な〈美しく青きドナウ〉が、1867 年にここで作曲された。また、この博物館には、ヴァイオリンを含め、彼が所有した楽器や家具のほか、彼が活動する様子を描いた絵画作品などが展示されている。また、彼は 3 回結婚しているのだが、ウェブサイトの説明によれば、彼の人生に関わるさまざまなもの

も展示されている。
画像では、９枚の写真でさまざまな展示物を見ることができる。

（５）シューベルト生誕の家 Schubert Gburtshaus

シューベルトは、1797 年 1 月 31 日にここで生まれた。今は博物館として公開されており、いくつかの有名な肖像画のほか、彼のトレードマークにもなっているメガネも、ガラスケースに収められて、ここで展示されている。
画像では、８枚の写真からさまざまな肖像画や絵画を展示する風景を見ることができる。

（６）シューベルトが亡くなった家 Schubert Sterbewohnung

シューベルトは、1828 年 11 月 19 日に、ここで亡くなっている。この家は、彼の兄弟が所有する住居で、シューベルトは亡くなるまでの数週間、客としてここに滞在していた。彼の最晩年の歌曲〈岩の上の羊飼〉D. 965 は、ここで作曲されている。展示には、彼の最後の数週間と死、葬式などにかんする資料などが含まれる。
画像では、５枚の写真で展示風景を見ることができる。

ウィーンに焦点をあてた「音楽文化史」のオンデマンド型（動画配信）の授業内容は以上の通りである。
視覚的な情報を重視して内容を構成しただけでなく、教室で前のスクリーン（あるいはモニター）に映されたものよりも、目の前のコンピュータの画面やスマートフォンの画面の方が見やすいことが実感された。おそらくそのため、学生によるコメントを読むと、こちらの意図が対面による授業の場合よりもむしろ、直接的に伝わっているようにも思われた。
オンデマンド型の最大のデメリットは、授業も、リアクションも、基本的に一方通行になってしまうことであると思われる。今後、どのような形態の授業を行うにしても、今回オンデマンド型の授業を通じて学んだノウハウは、活か

すことができるだろう。

注

[1] 筆者が非常勤講師として名古屋芸術大学で担当した「文化史」（2020 年度後期）の授業。

[2] ANA（全日本空輸株式会社）のウェブサイト Wien Visual Trip https://www.ana.co.jp/ja/jp/international/promotions/vienna/（最終閲覧日 2021.01.31）

[3] ウィーン博物館公式ウェブサイト 音楽関係の博物館 https://www.wienmuseum.at/en/musicus-one-ticket-six-sites（最終閲覧日 2021.01.31）

[4] Eisen, Cliff, and Stanley Sadie. "Mozart, (Johann Chrysostom) Wolfgang Amadeus." Grove Music Online. 2001（最終閲覧日 2021.01.31）https://www.oxfordmusiconline.com/grovemusic/view/10.1093/gmo/9781561592630.001.0001/omo-9781561592630-e-6002278233.

[5] グラウト、D. J.、C. V. パリスカ『新西洋音楽史（中）』戸口幸策、津上英輔、寺西基之訳、音楽之友社、1996 年、p. 276.

[6] Feder, Georg, and James Webster. "Haydn, (Franz) Joseph." Grove Music Online. 2001; Accessed 31 Jan. 2021. https://www.oxfordmusiconline.com/grovemusic/view/10.1093/gmo/9781561592630.001.0001/omo-9781561592630-e-0000044593.（最終閲覧日 2021.01.31）

[7] ウィーン国立歌劇場の公式ウェブサイト https://www.wiener-staatsoper.at/en/staatsoper/the-opera-house/history-architecture/#c4408（最終閲覧日 2021.01.31）

[8] ウィーン楽友協会公式ウェブサイト：協会の歴史　https://www.musikverein.at/en/history-of-the-musikfreunde（最終閲覧日 2021.01.31）

[9] 映画「エゴン・シーレ 死と乙女」予告編　https://youtu.be/NnA2iG3VzZc

[10] ウィーン市立公園ウェブサイト https://www.wien.gv.at/umwelt/parks/anlagen/stadtpark.html（最終閲覧日 2021.01.31）

[11] モーツァルトハウス公式ウェブサイト　https://www.mozarthausvienna.at/en/MOZARTHAUS-VIENNA（最終閲覧日 2021.01.31）

[12] “Mozart’s Apartment” https://www.mozarthausvienna.at/en/MOZARTHAUS-VIENNA/Museum/Mozarts-apartment（最終閲覧日 2021.01.31）

[13] ベートーヴェン博物館公式ウェブサイト　https://www.wienmuseum.at/en/locations/

beethoven-museum（最終閲覧日 2021.01.31）

[14] ベートーヴェン・パスクヴァラテイハウス公式ウェブサイト https://www.wienmuseum.at/en/locations/beethoven-pasqualatihaus（最終閲覧日 2021.01.31）

[15] ハイドンハウス公式ウェブサイト https://www.wienmuseum.at/en/locations/haydnhaus

[16] ヨハン・シュトラウス住居公式ウェブサイト　https://www.wienmuseum.at/en/locations/johann-strauss-wohnung（最終閲覧日 2021.01.31）

[17] シューベルト生誕の家公式ウェブサイト https://www.wienmuseum.at/en/locations/schubert-geburtshaus（最終閲覧日 2021.01.31）

[18] シューベルトが亡くなった家　https://www.wienmuseum.at/en/locations/schubert-sterbewohnung（最終閲覧日 2021.01.31）